# 若き日の野間清治の手紙　山鹿英助氏寄贈　図書館へ！

この手紙は郷土史家の故・粟田豊三郎さんの資料のなかから山鹿英助さんが発見したものである。

半紙に墨書された手紙には、

「小生義今般己を得ずつまらぬ者と結婚致し候

まだ顔も見ずまだ性質も家柄も何も知らず、明後日地入船後初めてわかるわけにござ候

しかしとにかく結婚致す次第親友のよしみ、ぜひぜひ祝儀たくさん募集方、ご周旋願い奉り候

一生一度のことに候　大至急お骨折り願い奉り候」

この手紙にある「ご祝儀大募集は」相手との人間関係のうえで相当な信頼関係あればこその手紙文である。

この手紙は野間清治が沖縄で県視学を務めていた時代、結婚直前に郷里桐生の先輩で、境野小学校長長島織吉・東小学校長相馬庄平・南小学校長真井晃の三人にあてたものであった。

いずれも師範学校の先輩で桐生のエリートたちとの結びつきの強さを物語っている。

清治は結婚にあたって自伝「私の半生」で「結婚は神これを定め給ふ、人これを破ることを得ず」「しかし神様、どうぞして少しでも美しきは、少しでも賢き者を我に興え給へ、そして我が大志大望を助け給へ」と当時の心境を記している。

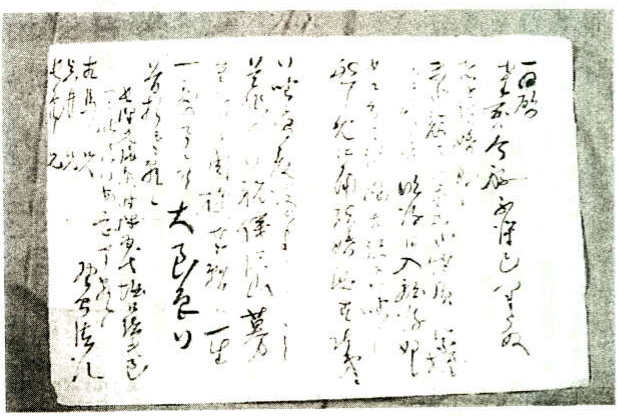
**清治を支えた賢夫人**

「まだ顔も見ずつまらぬ者と結婚致し・・・」と手紙に記されている女性は徳島で小学校の教員をしていた才女であった。

沖縄での結婚披露宴の席に清治の運命を変える電報が入る。

東京帝国大学法科大学主席書記の職が見つかったとの知らせであった。

服部左衛子は後に講談社を興す清治を支えた最上の秘書、相談相手でもあり経済的にも奮闘した賢夫人となったのである。



# 読書推進の広がり

## …野間文庫読書推進賞設置から四年…

桐生市立図書館には既に二十数年にわたって講談社から図書が寄贈され、「野間文庫」として収蔵されていることもあって、平成十一年、当時専務であった浜田博信氏・社長室長野沢遵宣氏と桐生明治館において、意見交換会を持った。

「野間文庫読書推進賞を設置して読書推進活動の柱に据えることはすばらしいことであります。講談社も惜しみない支援をします。」との浜田専務の言葉にこの活動に弾みがついたとも言えるのである。

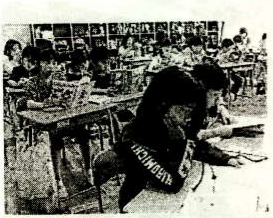
読書推進賞が設置され四年目を迎えた。これまでも副賞の図書「世界の絵本日本の絵本・辞典等がそれぞれの向き向きに応じて受賞団体、個人に講談社から直接送られている。

本年度も「野間文庫読書推進賞」の自薦他薦含めて積極的に応募下さるよう、野間清治顕彰会読書推進部から応募要項を配布したところである。

昭和三十年代後半、九州長崎地方に武士の子弟に朝読み、夕読みと云う書見台に向かって論語を朗読する習慣があり、この活動を取り入れて発展させた「親子二十分読書運動」が全国に広がり現在でも公共図書館活動の大柱になっている。

元南小学校長星野義一先生は大変読書活動に熱心な方で、この「この運動の指定」を受け、又空き教室を活用した読み聞かせの部屋「こぐま館」をつくり、PTAとの二人三脚で取り組んだ実績が評価され、野間文庫読書推進賞を受賞した。そして・・・・・・・

現在その広がりが南小学校（小島英一郎校長）では校内に静かに浸透して今年度から「朝の十分間読書」を始めた。校内全クラス一斉に活字の世界に集中した静かなひと時をもった。すばらしい！読書の波である。



子ども読書の日（4月23日）
南小学校　4年1組で